の他にも、所得税や住民税などの控除、医療費助成、公共料金や公共交通機関の利用料の割引など、生活に直接関わる支援をいただけます。

自分が境界知能だと知るまでは、仕事仲間に迷惑をかけてしまう理由がわからず悩みました。同時に、周囲と足並みを揃えなければならない苦しさも感じていました。しかし今は、経済的な支援のおかげで自分の歩幅で仕事ができています」

子どもの特性に合わせた進学を

境界知能の人は、日本の人口の約一四パーにあたるとされる。その数およそ一七〇〇万人。実に七人に一人が境界知能である現状において、周囲はどう向き合うべきか。

この点を考える上で指針となり得るのが、中学受験塾・阿部教育研究所（東京都文京区）だ。中学受験は、今や都内の小学生の約五人に一人が経験する「日常風景」。周辺の大手塾がこぞって成果を誇るなか、同研究所は一際異彩を放つ。「勉強とカウンセリング」を研究所の中核に据え、発達障害や境界知能の子どもを数多く指導してきた。代表の阿部順子氏はその意図をこう話す。

「当研究所では、受験生とその保護者のカウンセリングを大切にしています。本人、スタッフ、保護者が密に連絡を取り合って、受験や勉強、学校のことや子育て等の不安を相談できるのが特徴です。三〇年以上この業界にいてさまざまな『受験生の家庭』をみてきましたが、生徒の希望と保護者の願望は往々にして食い違うものです。そのベクトルの違いを的確に捉えて解決することで、親子関係が改善されたりやる気が出たりして、長い目で子どもを伸ばすことができます。

本人にとって中学受験を『良い経験』にしたいと思って指導しているので、無理な合格目標を設定することはなく、場合によっては偏差値の低い学校でも本人に合っている学校であれば薦めます」

阿部氏の姿勢は、まだまだ一部エリートの登竜門としてのイメージが強い中学受験に一石を投じる。

「ある中学受験生の話です。その子は境界知能で、公立小学校の勉強についていくのもやっとでした。しかし『理解のある教員のもとで学びたい』という意向があり、とある私立中学を一緒に目指しました。

ある日、お母様が暗い顔で面談にいらっしゃったのです。理由は、小学校の担任からの心ない一言でした。『小学校の勉強もろくにできないのに、私立中学に進学したいなんておかしい』と言われたというのです。

私は憤りを覚えましたが、同時に、世間の中学受験への見方が一面的であることも残念に思いました。現実には多くの私立中学がいわゆる『難関校』以外の中学校であり、それでも各々が素晴らしい教育理念を持って生徒に接しています。私立中学＝エリート養成所、という図式は本質的ではありません。むしろ私立中学は、ややテンポがゆっくりだけれども丁寧に生きる人たちを肯定してくれる場所になると私は思っています。事実、私立中学に進学した境界知能の子たちは、『自分と似た子がいて、いい友達になれたし、先生にも恵まれて楽しかった。自信を取り戻せた』と話します」（同氏）

阿部教育研究所の阿部順子代表

阿部氏は、プライベートでは四人の男児を育てる〝お母さん〟。

「私は子どもを『偏差値の高い学校へ行かせたい』と思う親の気持ちがよくわかりますし、勉強はできたほうがいいと思います。

しかし、より大切なことは、個々の子どもの特性をきちんと親が把握して、その子に無理のない範囲で学ぶ環境を設定することではないでしょうか。これは綺麗事ではなく、無理をしたり見栄を張った受験を選ばないほうが、その子にとって有意義な学校生活となり豊かな人生に繋がるという経験知から来るものです。

私の子どもには、境界知能ではないものの、健常よりだいぶ低い知能指数の子がいます。しかし彼のために私が親としてできることを考えた時、無理に受験のレールに乗せることではなく、息子の能力に合った学校選びをすることでした」（同氏）

阿部氏は、子どもたちに押し付けられがちな「優劣」について、こんな視座を持つ。

「親が子どもに勉強をさせる時、『社会は甘くないから、大人になってから困るぞ』と追い討ちをかけることがあります。すると、『劣った存在になりたくない』と子どもは怯えます。

しかし、本当にそうでしょうか。たとえ偏差値の高い学校に入る能力があっても、協調し、学ぶ謙虚な姿勢がない人は孤立します。それに、どんなに能力の高い人も、さらに高い能力を持つ人からみれば〝劣った人〟です。能力の高さだけが唯一の指標になれば、境界知能や知的障害を持った子の人生は、生きづらいだ